

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13205

研究課題名（和文）メンタル・スペース理論による日常言語に潜む提喩性の解明

研究課題名（英文）The Synecdochic Nature of Everyday Language Revealed by Mental Space Theory

研究代表者

大田垣 仁 (Otagaki, Satoshi)

近畿大学・文芸学部・准教授

研究者番号：60732360

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日常言語に潜む提喩性について、人間が持つ認知バイアスや誤謬推論に着目し、メンタル・スペース理論による記述と定式化・モデル化を行った。5年間の研究期間内で、「カテゴリーの飛躍および差異的特徴と提喩性」「“場所（の）N”形式の提喩と隠喩の連続性」「集合関係を越えて生じる提喩的認識」「キャラクター概念を生じさせる動機付けとしての提喩」「換喩と提喩の間にある連続と断続」の5つの問題群を“N1のN2”型比喩の記述と定式化、類による提喩を足がかりとした隠喩や換喩に対して提喩が排他的に保持する性質の抽出と定式化、種による提喩を足がかりとした提喩と換喩の連続性と排他性の抽出とモデル化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、提喩の外延的な性質をメンタル・スペース理論によって定式化し、その動機づけとして認知バイアスと誤謬推論を見いだした。これにより、未だに見解の一致をみない提喩の基礎づけに一石を投じたものと考えられる。

カテゴリーの包摂関係にもとづく提喩の2つの方向性は、単純な反転関係として見るべきではない。そこには換喩的な側面を持つもの（種による提喩）と持たないもの（類による提喩）がある。提喩の観察に際しては、名詞や名詞句といった単位での表れは現象が持つ氷山の一角にすぎず、その背景には命題間に生じる推論が潜んでいる。これを捉えることによって、名詞に生じる提喩も一貫した形で基礎づけることが可能になるだろう。

研究成果の概要（英文）： In this study, I focused on the synecdochic nature hidden in everyday language, paying attention to human cognitive biases and fallacious reasoning. I conducted descriptions, formalizations, and modeling based on the Mental Space Theory. In 5 years, I set the following problem groups: The leap of categories and differential features and their synecdochic nature/ The continuity of synecdoche and metaphor in the “place noun + の + noun” construction/ Synecdochic recognition that arises beyond collective relationships/ Synecdoche as a motivation for generating character concepts/ Continuity and discontinuity between metonymy and synecdoche

I converged these problem groups into three main themes: Description and formalization of “N1のN2” type figurative expressions/ Extraction and formulation of the exclusive nature of synecdoche by species with respect to metaphor and metonymy/ Extraction and modeling of the continuity and exclusivity of metonymy and synecdoche by species

研究分野：認知意味論

キーワード：提喩 認知バイアス 誤謬推論 メンタル・スペース理論 換喩 隠喩 比喩 名詞句

1. 研究開始当初の背景

(1) 提喩は隠喩や換喩に並ぶ比喩として認められつつも、何を提喩と認めるかという外延の基礎づけや成立原理にはよく分かっていない部分が多かった。

(2) ヨーロッパの伝統的なレトリックの文脈において、提喩は換喩の一種とみなされてきた。この提喩観は、1980年代以降に活発になった認知言語学における比喩研究においても、そのまま受け継がれている (Lakoff and Johnson 1980)。

(3) ただし、ヨーロッパの修辞学においても、提喩と換喩の区別を試みた、ベルギーのレトリック研究集団グループμ (Le groupe μ 1970) や、部分で全体を表す提喩 (= グループμ 的) は換喩) の存在をみとめないニコラ・リュウエ (Ruwet 1975) のような研究者も存在した。

(4) ひるがえって、日本国内のレトリック研究においては、グループμの影響を受けた佐藤 (1978) とそれを継承した瀬戸賢一の研究 (瀬戸 1997、Seto 1999) があり、彼らは提喩と換喩を論理関係の側面から積極的に換喩と区別する視点を提案した。

(5) これらの提喩 (および換喩) の研究史を背景として、本研究ではジル・フォコニエが提唱したメンタル・スペース理論 (Fauconnier 1985, 1997, 2002) を足がかりとし、「日常言語に遍在する提喩的認識は、いかにして記述、モデル化できるか」という問題の解明を目指した。

2. 研究の目的

(1) 日常言語に潜む提喩性を解明するために本研究では次の5つの観点を設定し、分析をおこなった。

- カテゴリーの飛躍および差異的特徴と提喩性についての観点
- “ 場所 (の)N ” 形式の提喩と隠喩の連続性についての観点
- 集合関係を超越して生じる提喩的認識についての観点
- キャラクター概念を生じさせる動機付けとしての提喩についての観点
- 換喩と提喩の間にある連続と断続についての観点

(2) 「カテゴリーの飛躍および差異的特徴と提喩性についての観点」とは、提喩が持つ機能について、特に提喩の修辞性と提喩による指示対象のカテゴリー化/インデックス機能について着目する観点である。

(3) 「“ 場所 (の)N ” 形式の提喩と隠喩の連続性についての観点」とは、“ 名詞1 + の + 名詞2 ” という構造に比喩が含まれるとき、提喩と隠喩 (および換喩) がそこにどう作用するかについて着目する観点である。

(4) 「集合関係を超越して生じる提喩的認識についての観点」とは、提喩として使用される名詞の属性について、ほんらい差異的特性である属性が類概念のようにふるまう現象 (e.g. アイスコーヒー、アイスクリーム、アイスホッケーなどを要素とする集合名に “ アイス ” が使用される) に着目する観点である。

(5) 「キャラクター概念を生じさせる動機付けとしての提喩についての観点」とは、比喩的属性がキャラクターの名づけや叙述に使用されるとき、提喩属性がこれにどうかかわるかについて着目する観点である。

(6) 「換喩と提喩の間にある連続と断続についての観点」とは、古来、定義や外延の規定に議論

があった提喩に対して、換喩との比較を行うことで、メンタル・スペース理論や推論様式の分析からあらためて基礎づけをおこなう観点である。

3. 研究の方法

(1) 上記の観点を組み合わせることで、大きく3つの研究テーマを設定した。まず、「“場所(の)N”形式の提喩と隠喩の連続性についての観点」については、N1を場所名詞に限定せず、比喩の介在が推定される“N1のN2”形式の具体例を広く収集し、記述をおこない、それらをメンタル・スペース理論の観点から定式化した。これを“テーマA”とする。

(2) 次に、「カテゴリーの飛躍および差異的特徴と提喩性についての観点」「集合関係を超越して生じる提喩的認識についての観点」「キャラクター概念を生じさせる動機付けとしての提喩についての観点」については、いわゆる“類による提喩”の規定を中心にメンタル・スペース理論の観点から基礎づけと定式化を行った。これを“テーマB”とする。

(3) 最後に、「換喩と提喩の間にある連続と断続についての観点」については、当初メンタル・スペース理論におけるブレンディングの観点から分析を試みたが、定式化・モデル化に困難が生じたので、認知バイアスや誤謬推論などの主観的な推論様式の観点からの分析に切り替えた。これを“テーマC”とする。

(4) 分析に際しては、書籍、雑誌、新聞記事、マンガのセリフ、SNSの投稿等の書記資料やコーパスをデータに用いた。

4. 研究成果

(1) 2019~2022年の当初4年間に設定していた研究期間は1年の延長を経て、5つの研究の観点を3つの研究テーマに収斂させることで実施した。

(2) まず、2019年度から2020年度では、テーマAについて研究をおこなった。手始めに、“N1のN2”形式の名詞句にあらわれる比喩について、国内外の先行研究の収集整理を行った。その結果、提喩と隠喩だけでなく、換喩や比喩ではない通常表現との連続性を吟味して、この課題に取り組む必要が生じた。通常表現における“N1のN2”型名詞句の基礎づけについては西山(2003、2013)や三宅(2011)がある。本研究では、これらの研究に導かれつつ、そこにメンタル・スペース理論の観点を導入することで、“N1のN2”型名詞句について、比喩を含まない類型と比喩が存在する類型との間に連続性を見いだす記述を行い、定式化することに成功した。

(3) 結論として、比喩が介在する“N1のN2”型名詞句について、以下のことを述べた。すなわち、

隠喩タイプ・提喩タイプ・換喩タイプともに、名詞句内のある名詞がもう一方の名詞と無関係に比喩表現になるサブタイプをもつ。この類型は、統語的には主要部後置型である。

隠喩タイプや提喩タイプは、N1が名詞句全体の指示対象に関連するパラメーターをあらわし、N2を限定修飾するサブタイプをもつ。この類型は、隠喩タイプにかんしては統語的には名詞句が一体となっていてどの統語タイプにも属さない。また、提喩タイプにかんしては主要部後置型である。換喩でもこのタイプをつくることができるが、提喩による限定が同時にかかる。

隠喩タイプ・提喩タイプ・換喩タイプともに、比喩の概念構造をメタ的にしめすサブタイプをもつ。統語的には隠喩タイプは主要部同格型か主要部倒置型である。提喩タイプは提喩関係による固定化により名詞句が一体となるため、どの統語タイプにも属さない。換喩タイプは主要部後置型である。

以上の類型がおこなう認知操作はアクセス原理によって定式化できる。

(4) 次に、2021年度はテーマBについて研究を行った。すなわち、類による提喩を中心に、提喩が隠喩や換喩などの比喩に対して、排他的かつ本質的に保持している特性を提喩性と規定し、

その正体を発見することを目指した。具体的には、理論面での提喩の再定義、定式化が研究のゴールとなった。

(5)この観点の背景には、認知言語学と日本のレトリック研究における提喩観の対立があった。提喩はながらく定義がゆれており、伝統的なヨーロッパの修辞学はこれを換喩の一種とし、その影響下にある認知言語学も提喩を換喩の一種または、換喩と連続するものとしてとらえてきた。

(6)一方で、佐藤信夫や瀬戸賢一などの日本のレトリック研究者はグループμの考えをもとに、カテゴリーの包摂関係をもつもののみを提喩として再定義した。このかんがえは佐藤をうけた Seto (1999) で海外のこの領域の研究者も知るところとなったはずだが、いまだに認知言語学では全体 部分の関係を代表的な提喩の類型とする。

(7)これは、イメージ・スキーマによって換喩と提喩をみると、両者の認知的な構造に類似性がみられるからである。提喩と(全体 部分の)換喩を独立させるか連続するものとしてみるかは、たがいをほとんど意識しない趣で現在も併存している。

(8)この状況に対し、提喩の成立について語用論的コネクターによるカテゴリー間の外延操作というメンタル・スペース理論の観点を導入することで、換喩と提喩につきのような共通点と相違点があることをあきらかにした。

提喩はトリガーの属性による、ターゲットのカテゴリーや値に対する限定という換喩とおなじ特徴をもっている。

提喩における個別化と一般化という操作は語用論的コネクターを介したカテゴリーの限定という操作にまとめることができる。

類による提喩は同時理解という換喩にはない特性をもっている。

提喩と換喩は、(視覚的)焦点化や婉曲化という共通する発話のストラテジーをもつ。

「よわい類による提喩」が存在し、名詞句指示のありかたとしては通常のコネクター(i.e. 役割関数)とかわらないが、発話のストラテジーにおいて通常の名詞句解釈にはない特性をもっている。

(9)最後に、2022年度から2023年度は、テーマCについて研究を遂行した。換喩と提喩の間にある連続と断続について、種による提喩と換喩の類似性を分析の足がかりとした。

(10)この着想に至った背景として、メンタル・スペース理論にもとづく外延的なアプローチでは、「提喩性」の正体を記述しきれないことがあげられる。つまり、このアプローチによって隠喩や換喩と提喩の連続性と相違をカテゴリー配置の点では明示できたが、提喩(特に種による提喩)の語用論的コネクターそのものがどのような認知操作(認知的アルゴリズム)を持つものであるかはブラックボックスのままであった。

(11)したがって、2022年度は提喩の認知操作を究明するために、関連研究の洗い直しを行った。具体的には、認知意味論からのアプローチとして Croft (2002) によるドメイン・ハイライトニングの観点、関連性理論からのアプローチとして Carston (2002) によるアドホック概念構築の観点をみだし、これらを批判的に検討することで、提喩性の正体が認知的なバイアスがかかったスケール操作にあるのではないかと、ということにたどり着いた。この発見について、スケール概念と、メンタル・スペース理論の主要概念のひとつであるブレンディング理論(概念統合理論)を用いて、種による提喩の発生条件について検討した。

(12)しかしこのアプローチは、スケール概念と因果関係の逆転現象をブレンディングの観点で強引にモデル化しようとした結果、妥当な形でモデル化を行うことができなかった。そこで、2023年度は認知バイアスと誤謬推論の観点からあらためて、種による提喩の成立条件を検討することにした。結論として、種による提喩が次のような成立条件によって実現していることが明らかになった。

種による提喩について、文レベルで生じるのか語レベルで生じるのかあいまいなものがみられるが、種による提喩の動機づけを命題間の推論にもとめることで、これらを包括的に説明することが可能になる。

このとき、種による提喩は“十分性の手がかり”にもとづく Type1 と、“後件肯定の誤謬”にもとづく Type2 にわかれる。

Type2 によって、固有名詞の普通名詞化のメカニズムを説明することが可能になる。

語レベルの換喩と種による提喩は指標にもとづくいいかえである点で類似しているが、Type1 の推論が発現するかどうかの点で種による提喩のほうが生成条件が厳しい。

文/句レベルの換喩と種による提喩は、因果関係を共通点として、その関係のどこに着目するかによって換喩とも提喩ともとれる。

付記：自著論文についての訂正

(1) 大田垣 (2020) について。隠喩タイプの定式化 (p.86) について、 $F()$ の括弧内にはパラメーター (= スペース) が入る。これが式 (51) では 2 つになっているが、状況によりそれ以上になりうる (e.g. (53))。 (53) では、 $F_{\text{隠喩}}()$ にパラメーター “ミルク、I、海” が代入されることで、任意の現場スペース M における牡蠣の値を限定する。このとき、パラメーター “海” は特定の場所ではなくイマジナリーなもので、「牡蠣」のフレームから “密輸” されたものと考え。よって定式 (51) は厳密には、 $F_{\text{隠喩}}(r1, M1, M2, \dots, Mn) = r2(M3)$ [$r1=N2, M1=I, M2=N1, M2 M1, M3 = \text{任意の現場}$] となる。

(2) 大田垣 (2022) について。本文 (p.233 とそれ以降) で Sp と Sg の表記が逆になっていた (また、g は généralisation ではなく généralisante の略であり、p は personnalisation ではなく particularisante の略であった)。これらの関係におけるグループ μ の定義と近年の定義 (谷口 2003 : 132 参照) とで、上下のどちらのカテゴリーを定義の基準として現象を捉えるかが反転していたため筆者に錯誤がおこってしまった。よって、Sg が “全体で部分をあらかず関係”、Sg が “類で種をあらかず関係” になる。そして、Sp が “部分で全体をあらかず関係”、Sp が “種で類をあらかず関係” になる。

引用文献

- 大田垣 仁 (2020): 「比喩が介在した “N1 の N2” 型名詞句について」『語文』115, 1 - 21, 大阪大学国語国文学会 .
- (2022): 「提喩性について--語用論的コネクターから提喩をみる--」『語文』116 - 117, 58-74, 大阪大学国語国文学会 .
- 佐藤信夫 (1978): 『レトリック感覚 ことばは新しい視点をひらく』, 講談社 .
- 瀬戸賢一 (1997): 『認識のレトリック』, 海鳴社 .
- 谷口一美 (2003): 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』, 研究社 .
- 西山佑司 (2003): 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房 .
- 西山佑司 [編] (2013): 『名詞句の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』, ひつじ書房 .
- 三宅宏宏 (2011): 『日本語研究のインターフェース』, くろしお出版 .
- Carston, R. (2002): *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Wiley-Blackwell.
- Croft, W. (2002): The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. In Dirven, R. and R. Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 161-205.
- Fauconnier, G. (1985): *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- (1997): *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. and M. Turner (2002): *The Way We Think: conceptual blending and the mind's hidden complexities*, Basic Books.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980): *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Le groupe μ (1970): *Rhétorique Général*, Librairie Larousse.
- Ruwet, N. (1975): Synecdoque et métonymie, *Poétique*23, 371-88, Edition du Seuil, Paris.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大田垣 仁	4. 巻 116、117
2. 論文標題 提喻性について 語用論的コネクターから提喻をみる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語文	6. 最初と最後の頁 58-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大田垣 仁	4. 巻 115
2. 論文標題 比喩が介在した"N1のN2"型名詞句について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語文	6. 最初と最後の頁 102-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大田垣 仁	4. 巻 35-2
2. 論文標題 種による提喻は換喩なのか？ 種による提喻の背景にある2種類の推論	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文学・芸術・文化	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大田垣 仁
2. 発表標題 種による提喻は換喩なのか
3. 学会等名 金水研・岡崎研合同研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------